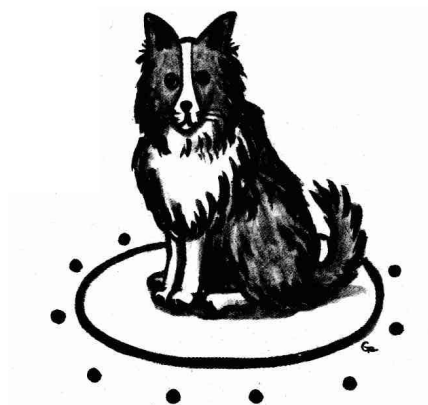


ブロンディ

かねこたかし





ブロンディ
かねこたかし

白馬出版

かねこ たかし

本名 金子 隆

1942年11月24日生まれ。

1961年フジテレビ入社、1969年日本大学法学部卒。

放送記者、報道番組ディレクター、事業局イベントプロデューサー。(株)サンケイ出版出向(社長付出版プロデューサー)。(株)フジテレビフラワーセンター出向(専務取締役)。フジテレビ復社後、事業局事業推進担当部長、報道局専任部長。現在システム開発室専任部長。

主な著書「世界の小学校で」、「サンゴ礁の楽園 モルディブ」

ブロンディ

1993年1月27日 初版第一刷発行

著 者 かねこ たかし

発行者 中村純子

発行所 白馬出版株式会社

東京都新宿区市谷田町3-6 〒162

電話 03(3235)7661(代)

振替 東京2-154873

印刷所 文唱堂印刷株式会社

製本所 黒岩大光堂

ISBN 4-8266-0303-7 C0074 © Takashi Kaneko

Printed in Japan

もくじ

まえがき

ブロンディ

シンデレラはアース2

先輩

3

9

99

203

装丁 安彦 勝博
装画 石毛惠美子

まえがき

僕は、本当は呑気じゃないのに呑気たらしとしているし、本当はきょうのうちにも散ってしまうノウゼンカズラみたいな度量なのに、陽さえあれば季節を忘れて咲き続けるゼラニウムみたいなおおらかさを心の内にねだっている。いい歳をして、時には乙女のようにときめきたいとも思っている。

だから僕がモノを書くとき、呑気さとおおらかさと、ときめきを、こねこね丸めたダンゴのような文章ができ上がる。実に幼稚だと思うのだが、元来がちつぽけな了見の人間だからどうしようもない。この本もそんな僕の延長線上にあるこねこねこねの本である。

さて、最初の「ブロンディ」。これは、昨年いただいたコスモス児童文学新人賞の受賞作を、ちよつぱり再編集したものである。ひとの口からモノを言わせる私

小説。つまり長女の頭の中を無断で引つ掻き回して「この娘だったら、せいぜい考えることはこの程度」と思い浮かべたことを書き綴ったつもりだったが、書き上げてみると長女の頭の中も僕の頭の中も、どこと言って変わりが無い。レベルに差が見いだせないのである。情けない。

天地を創造したのは神である。人間を創造したのも神である。でも、創造とは言わないが、娘を世に登場させたのは僕と僕の女房である。だからだったんだ。僕と娘が、互いに互いを凌げない関係にあったのは…。

主役を務める愛犬ブロンディ（実名はフレンディ）もまた、飼い主である僕たちを凌げない。僕たちが彼を凌ぐことができないように…。

この物語は、わが家の粗忽な犬と僕たち粗忽な一家の、何でもない平凡な生活を書き綴ったものである。

二本目の「シンデレラはアース2」は、ほとんど会話ばかりで綴っているが、実はこれ、芝居用に書いたもの。

題名 『EARTH II ～もうひとつの地球』

原作 この本

脚本 かねこ たかし

脚色・演出 原 真由美（劇団まぜ卵シアター主宰）

制作 劇団まぜ卵シアター

公演 平成5年1月22日（金）／1月24日（日）／昼夜計5回公演

演出の原君は、かつて僕がフジテレビフラワーセンターの専務を務めていた頃、先輩に頼まれて雇った社員である。頼まれて雇った社員にロクなタマはいない。このタマも、まあそんなもんだった。時々職務中に、うつらうつらと舟を漕ぐ。何か事情があるのでは…と聞いてみたら、やっぱり事情があつた。

テレビ西日本というテレビ局の受付に座っていた彼女は、ある日突然「都ば出て、芝居せんと！」と、おのれに叫んだ。決めたら早いは大物の片鱗か。会社に辞表を出し、後先構わず東京へ。見兼ねたテレビ西日本のお偉いさんからフジテ

レビの先輩に「鉄砲玉をよしなに」との依頼あり。故にその先輩は僕に彼女を押しつけた。早い話、彼女はフジテレビフワワーセンターへ仕事をしに来たのではなく、文学座への勉強代をひねり出すため、そして夜の講義に備えて充分な睡眠を取るために来たのである。

やがて彼女は、当初の計画通りに独立し、まぜ卵シアターなる劇団をつくった。その劇団も、すでに5回の自主公演を重ねて今度が6回目。

「6回目かあ……。じゃあ6（ロク）でもない芝居でもプレゼントしよう」てなわけで、この本は僕から『かつてのロクでもない部下』への贈り物なのである。だからして、この作品は、小説ではなくて『読む芝居』である。芝居だから会話ばかりで、情景描写に乏しい。読者には観客になったつもりで、勝手に情景や登場人物の心理をイメージしていただこうとおもっている。僕は本当は、実に怠惰なのである。

最後の作品「先輩」は、これこそ僕の夢である。

僕は、夢の中で美味しいものを食べることがとても好きである。これほど素晴らしいことは他にはないと思っている。食べても食べても、お腹が一杯にならないのだから。

大好物なのに、気がすむまで食べることができないものは山ほどある。例えば寿司。僕の行きつけの店、上尾駅前「うめかわ」の寿司は旨い。ここで僕は、エビもカニもウニもイクラも、カズノコ、トロ、カツオ、サヨリ、タイ、ヒラメ、ホヤ、アカ貝、トリ貝、ミル貝、アオヤギ、アワビ、アジ、コハダ、タコ、イカ……、何から何まで、ひと通りにぎってもらって食べたいのだが、そんなにお腹に入らない。仕方がないからにぎりをあきらめシャリなしのツマミだけにするのだが、それでもひと通りは食べ切れない。結局、酒を飲み飲みウニ、トロ、サヨリ、トリ貝程度で箸を置く。

中華ソバ屋に入っても悩みは尽きない。ラーメンは外せないけど、ギョウザも

野菜炒めも春巻も食べたい。だけど全部は食べられない。

「ああ神様、僕は干支などウマでなくてもよかったんです。僕が欲しかったのは、干支のウマではなく、ウマなみのお腹だったんです」と恨みごとを言ってみても、結局はみじめにラーメンをするのが関の山だ。

僕は、食べても食べても好きなものを食べ続けていられるお腹に憧れている。そんな憧れが、この作品に生まれ変わった。そう、僕は心底卑しいのである。

ブ
ロ
ン
デ
イ

私の家は父がサラリーマン、母が専業主婦、私は中学二年で妹が小学五年生。まあどこから見ても平均的な、そして大いに平凡なサラリーマン一家である。朝起きてから夜寝るまで、ヒマな話は山ほどあっても家をあげての大事事件は起こらない。最近起こった大きな出来事といえば、三年前から家族の一員に加えられた犬のブロンディが、自分よりも大きなオス犬を見ると狂ったように吠えかかるので、ついに口輪を買うハメになったぐらいである。もっともこの口輪使用にあたっては、私と妹が大反対をして結局二対二、家族二分の大騒動を思わせたが事件と呼ぶには至らなかった。私と妹が闘う前から降参したのだ。母を向こうに回した戦いはむずかしい。私たちにとっては月給を運んでくれる人よりも、毎日の世話をしてくれる人の方が怖いからである。私は「洗濯ぐらい自分でしなさい!」と目をつりあげて叫ぶ言葉を何よりも恐れるし、妹は「コロッケ買ってよ。チョコ買ってよ」と、好き勝手が言えなくなる食糧事情を恐れている。

これに比べれば給料運び屋の父は心配ない。給料が母の管理する銀行預金通帳

に振り込まれるという得がたい事実があるにしても、元来が影響力に乏しい。何かがあつて二日や三日口を利かなくても困りはしないし、いかなる場合であつても大会社の社長のような決断力に富んではない。インディー・ジョーンズの心臓えぐりを見て「今夜は眠れない」と、独りつぶやく人なのだから。

こんな、平凡を絵に描いたような家庭だから幸せである。私も妹も、物心がつく前からお父さんをターちゃんと呼び、お母さんをチーちゃんと呼ぶ。そんなことを抜きにすれば、やっぱり平凡平凡平凡平凡。毎日があきるほど幸せなのである。

わが家は埼玉県の上尾市にある。三年前に買い求めたちっけな建て売り住宅に住む。いえ、ちっけな……と言ったが、それはターちゃんの口ぐせであつて、私はただのサラリーマンにしては「よく頑張ったね」とほめてやりたい。上を見ればキリがないが竹ヤブから大金を拾ったわけでもないのだし、望みすぎたらバ

チが当たる。

駐車場はあるが車はない。

「駐車場？　これはさあ、ガレージだつつの。ダサイ呼び方すると田舎つべつて呼ばれるよ」と、生れつき上尾育ちの加那は言うが、車を持ったことのないわが家での会話にこの言葉はない。第一、ガレージと呼んだらアイツが怒る。ここはアイツ、つまり「ブロンディの部屋」なのである。

ブロンディはシェットランドシープドッグという近ごろはやりの犬でオスの三歳、生後一カ月半のときに妹にみそめられ、大宮のそごうデパートからやって来た。

この買物におけるかけひきは、いまもわが家の語り草だ。もともと母・チーちゃんはある生き物が好きではなかった。これは親ゆずりである。何せ私のおばあちゃん、つまりチーちゃんのお母さんは、間違つても犬猫の影さえふまない。放し飼いの犬を見れば、それがずいっと遠くにかすんだだけで逃げて帰るか、目

的地まで二倍三倍の遠回りをする。独特のレーダー（勘とも言う）が働いたときは、家から外に出ることすらしない。その親にしてわがチーちゃんがあり、私があるのに、妹はなぜか姉の私に似ていない。

ふとどきにも、妹はいま獣医さんになりたいと思っている。私が妹と同じ歳のころは、ありふれた話だが学校の先生になりたいと思っていた。

チーちゃんの見ていた夢は分らない。なぜか話してくれないのだ。実現できなかったことをいつまでもウジウジ乙女のように思い続けることを好まない性格だから、今後も白状はしないだろう。人に言えないほど大きな野望を描いていたのかも知れない。例えば、小学生の身でありながらプレスリーのお嫁さんになったかったとか……。そう言えば、いまはプレスリーがいなくなってしまうたから、マイケル・ジャクソンと、その妹のジャネットを愛している。

これに比べるとターちゃんは腰が軽い。

ターちゃんはプロ野球の選手を夢見ていた。しかし、これは単なる夢である。